



すべての視力障がい者に福音を！ キリスト教良書を！

# ホ・ロゴス

2023年10月  
60号

## 「ホ・ロゴス」の力

ὁ λόγος

吉田 隆

(神戸改革派神学校校長・甲子園教会牧師)

本紙がなぜ「ホ・ロゴス」と名付けられたのか、なかなか意味深いネーミングだと思っています。

「ロゴス」はギリシア語で「ことば」という意味ですが、そこに「ホ」という定冠詞が付くと、これは“The Word”。すなわち『ヨハネ福音書』冒頭で語られる永遠の神の御子、先在のキリストを指す言葉になるからです。「初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった」（ヨハネ 1:1）と言われる、あの「言」が“ホ・ロゴス”です。

先在のキリストを「言」と表現していることも興味深いことです。言葉とは人格から発せられる意思の表明です。そして、このキリストという「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった」（1:4）と言われます。キリストという「言」は、冷たい言葉なのではなく、すべての人間を照らす温かい命の光を放つ愛の言葉、すなわち福音だということです。

たとい肉体の目は不自由であっても、その心の目に命の光を届けたい、神の愛の言葉を届けたい。その静岡キリスト教育人伝道センターの理念が、まさに「ホ・ロゴス」という本紙タイトルの意味ではないかと、改めて考えさせられた次第です。

この「ホ・ロゴス」も記念すべき60号を迎えました。今号には、センター60号を記念して、「静岡キリスト教育人伝道センターの歩み」が記されています。

本センターの創設はまさに「光あれ」という言葉によって闇の中から光が創造されたような、神による新しい働きの創造とも言うべき出来事でした。

“三重苦”と言われたヘレン・ケラー（1880－1968年）は幼少期、自分に残されたあらゆる感覚を研ぎ澄ませて、実際には私たちが想像するよりはるかに豊かな世界を生きていたようです。けれども、そのヘレンの世界が革命的に変えられたのが有名な“井戸端の奇跡”でした。井戸のポンプから流れ落ちる水を手に感じながら「water」という単語が単なる記号ではなく、意味を持つことを悟った。それは「言葉の神秘が顕わにされた」瞬間だったと『自伝』の中で振り返っています。

“水”という一つの単語が人間の人生を変えるのであれば、まして神の「ホ・ロゴス」の神秘は私たち一人ひとりの存在を根底から造り変える力を持っているはずです。ちょうど、青山先生を造り変えたように。

人間にとっての本当の障害とは、目が見えないことでも耳が聞こえないことでもない。神の命がけの言葉に目を閉ざし耳を閉ざす、頑なな心です。そのような人々の心をも癒し、命の光を豊かに届けるために、センターと本紙が用いられますよう、心から願ってやみません。



創設者の故 青山輝徳牧師

静岡キリスト教育人伝道センター広報紙「ホ・ロゴス」第60号 2023年10月発行

発行人：理事長 遠山信和 印刷：リブウエル聖恵

発行：静岡キリスト教育人伝道センター

〒422-8041 静岡市駿河区中田1丁目5-21

Tel 054-285-0496 Fax 054-285-0746 振替 00870-2-7003

Eメール：shizumouden@dct7.net HP：http://www.dct7.net/

開館時間：祝日等を除く月曜日から金曜日 午前10時～午後4時

## 静岡キリスト教盲人伝道センターの歩み その1

**初めての礼拝** — 1953年（昭和28年）11月3日、静岡教会の第1回礼拝が行われました。まだ終戦の傷のいえない中、全盲の青山輝徳牧師と妻の鶴江姉の開拓伝道が実を結び、近隣から十数名の方が参加し、青山宅での最初の静岡集会が開かれました。その中には市内の盲信徒や近辺に住む信者も加わっていました。また、同時に静岡盲学校においても聖書の学び会（バイブルクラス）が毎週土曜日に行われ、多くの盲学生が集会に導かれました。当時は戦争中の栄養不良で視力に障害を持つ生徒が多かったのです。点字書も少なく、生徒たちは喜んで聖書を学びました。

**土地取得** — そんな中、青山牧師ご夫妻の出発点が岐阜教会であったことから、岐阜で日本伝道に携わっておられたマカルピン宣教師が盲人伝道に関心を示して下さり、140万円の資金を提供、現在の静岡教会の土地94坪を購入することが出来ました。

**祈りと献金** — 当時、盲学生たちが卒業しても就職先は厳しく、盲女子が鍼灸の仕事しながら教会生活を守ることはとても困難でした。30数名の会員でしたが、熱心に盲婦人ホームと会堂の建設のために祈り、計画して献金をしました。

**盲婦人ホーム開設** — 1962年（昭和37年）、取得できた土地に小さなバラック建ての盲女子のためのホームを建てることができました。

**会堂建設** — 1965年（昭和40年）、ようやく小さな教会堂と、併設して家族で住める盲婦人ホームを建てることができました。

**点訳書の寄贈** — この間、マカルピン宣教師やポチャード宣教師、つのぶえ社の片山先生たちのお働きで、岐阜刑務所の受刑者への更生指導としての点字指導が行われ、続々と点訳本が青山先生のもとに届けられました。

**盲人伝道センター開設** — 1968年（昭和43年）4月、念願の職員が与えられ、ホームのお世話を初め、点字図書の整理や盲人図書館としての概要がつくられ、正式に、盲婦人ホームと点字図書館を合わせた「盲人伝道センター」が開設されました。趣意書が作成され、点訳奉仕・利用・賛助を広く呼びかけました。

そんな中、岐阜刑務所から、約二百冊の点訳図書の寄贈がありました。この点訳図書は岐阜刑務所の受刑者たちが長年かかって点訳したものでした。彼らはマカルピン先生たちの刑務所伝道によってかつて犯した罪を悔い改め、イエス・キリストにたいする信仰を持ち、その証しとして服役中にキリスト教書の点訳奉仕を続けて来られたのです。これらの点訳書はすべて図書館の蔵書に加えられました。

**順調なスタート** — 1968年（昭和43年）11月には、点字図書館として、点字書の貸出事業が順調にスタートしました。点字図書館の貸出は郵送を中心として行われました。図書の目録を作成して利用者に送り、利用者の貸出申し込みを受けて図書を郵送し、また郵送で回収するというものです。福祉事業の一環として点字書に対しては郵送料はかかりません。当時は貧しい盲信徒が多く、貸出料は一切取らないことにしたので利用者は無料で点字図書を利用できました。



**手書きでの宛名書き** — 当時は、図書目録の送付先の宛名は、教会員が家に持ち帰って手書きで書き、全国の教会に、支援と図書の利用と点訳奉仕を呼びかけました。当時、キリスト教関係の点字図書は皆無に等しい状態でしたから、全国から多くの利用者や奉仕者が与えられました。

**点字書出版** — 盲信徒に教理書を届けることは青山先生の念願の教理問答書の点字出版が行われました。最初の出版物は、「キリスト教初歩教理問答」「マキルエン博士説教集」「つのぶえ」

「ウェストミンスター信仰基準」の点字図書でした。貸し出しは初めは点字書だけでしたが、この頃から録音テープの貸出も行うようになりました。

**改革派教会の支援** — 「改革派教会68年度大会」において連合長老会による静岡キリスト教盲人伝道センターへの自由募金を認める提案が可決され、静岡教会が初めた盲人伝道事業が改革派教会全体から認められました。この知らせに、職員も牧師も教会員も喜び、各種の修養会に出席してアピールし、利用・奉仕・献金を呼びかけました。クリスチャン新聞などにも広告を出しました。

**盲人伝道センター感謝会** — 図書の貸し出しは、全国の盲信徒に喜ばれ、毎年一回、教会設立記念の11月3日に、「盲人伝道センター感謝会」が開かれるようになりました。全国から大勢の信徒が集まって交わり、神に感謝を捧げました。

**「ホ・ログス」を発行** — 1969年（昭和44年）から「広報紙」として「ホ・ログス」を発行しました。これはキリスト教点字図書館の働きを広く一般に訴え、利用・奉仕・賛助を呼びかけるものです。最初の図書目録は69年11月に発行された「ホ・ログス」2号に見ることができます。そこには68点の点字図書が載せられています。

**キリスト教点字図書館の必要性** — 翌年70年4月に発行された「ホ・ログス」3号には「キリスト教専門の点字図書館をめざしテープ・ライブラリーも発足」と題して、青山牧師が「キリスト教専門の点字図書館の必要性」について述べておられます。①日本にはキリスト教専門の点字図書館が無いこと。②これまでに点訳され、又は録音されているキリスト教の名著・古典・優良図書の数が少ないこと。③今日、キリスト教会の中に拡がりつつある無神論化・世俗化の傾向を憂慮すること。このような傾向に対して、盲人伝道の面でも、信徒や求道者の信仰を正し、正統的な信仰の良書をたくさん点訳、あるいは録音して貸出のできる点字図書館がぜひ必要であることを訴えられています。

**理事会の充実** — 1975年（昭和50年）、これまで、盲人伝道センターの運営は、教会の内部での理事会が担ってきましたが、この年の感謝会の後に初めて外部理事を加えることになり、センターの仕事を外部の人にももっと知ってもらい、かつまた助言を仰ぐ組織作りが行われました。

**新会堂の建設** — 1979年（昭和54年）、蔵書も増え、書庫が手狭になってきたため、外部からの働きかけがあつて資金を調達することができ、鉄骨造りの現在の3階建ての静岡教会が建設されました。1階が教会会堂、2階が盲人伝道センター事務所と盲婦人ホーム、3階が書庫と牧師館の現在の新会堂が建設されました。

**日本で唯一のキリスト教専門盲人図書館へ** — 今回は、センターの黎明期を記しましたが、これから時代が大きく変わっていきます。神様は、青山輝徳牧師ご夫妻がはじめられた盲人伝道の志を心に留められ、働き人を与えて下さり、祝福してくださいました。これから、センターは、資料の充実、機器の発展など日本で唯一のプロテスタント盲人図書館として発展していきます。次回、その2をお届けいたします。

（その2に続く）



# センターはこんな働きをしています！

静岡キリスト教盲人伝道センターは、キリスト教図書専門の点字図書館です。視力に障がいのある方、また高齢や病気で活字での読書が困難な方々のために、点字図書・録音図書の製作と貸し出しを行っています。

点字・音声図書の全国最大データベース「サピエ図書館」に加盟し、製作完成データをアップし提供しています。

## トピックス

### ■ 点字「口語訳聖書」完成！

皆様から多くのリクエストをいただいていた口語訳聖書の点字データ版が5年がかりで完成しました！

(旧約全35巻、新約全14巻)

すでにサピエ図書館へはデータ・アップをしています。読者からも感謝の声をいただいています。多くの方にご活用いただけますように。

### ■ 通信講座をご利用ください

初心者からの音訳通信講座、点訳通信講座を開設しています。

点訳指導員：森平邦子

音訳指導員：三田村苗美

どちらもご自宅のパソコンを使用し、ネットでデータを送受信しています。ご興味のある方は、お問合せください。

### ■ 表彰おめでとうございます！

音訳：伊藤節子様

音訳：伊藤良子様

鉄道弘済会による第53回朗読録音奉仕者顕彰（東海地区）にて、お二人とも朗読奨励賞を受賞されました！

### ■ 「ちから」誌に紹介されました！

音訳グループ「犬山虹の会」が月刊誌「ちから」2023年9月号に紹介されました！

## サピエ図書館へセンターから登録したキリスト教図書

点訳図書：1382タイトル

音声デジター図書：3201タイトル

テキストデジター：80タイトル

### ※「サピエ図書館」とは

サピエ図書館は全国の視覚障がい者を対象にしています。日本点字図書館がネットワークシステムを管理し、現在の利用登録者数は1万9千人。学校や施設など440以上の団体が加盟し、約8万人以上の視覚障がい者等に資料や情報を提供しています。センターではキリスト教関係の図書がたくさん利用され、伝道に役立つことを願っています。

## ’23年上半期の人気図書

点訳

『科学ですべて解明できるのか』 ジョン・レノックス 著

『わかりやすい旧約聖書の思想と概説 下』 西満 著



音声デジター

『明けない夜はない 人生の転機』 いのちのことば社 編

『神の主権のもとに生きる ヨブ記を読む』 野田秀 著



テキストデジター

『その「宗教」は本物か 旧統一教会の不都合な真実』

和賀真也・花田憲彦 著

## 私の一押し！

### 【三浦綾子さんの作品】

私が三浦綾子さんの作品に触れたのは、今から半世紀近く前のことでした。「愛すること信ずること」という随筆集でした。読んだ後、温かさを感じました。次に塩狩峠に出会いました。読後、感情が込み上げ、泣けて泣けて、涙で一杯になったことを覚えています。宝石のようにちりばめられた沢山の言葉は、わかりやすく、素直に心の中に入り、心が温まり素直になって、凍えていた心がほぐれて、いつも感謝の気持ちでいっぱいになります。読書が好きだった母に生前中に聞かせてあげたかったです。キリスト教を理解してくれるきっかけになってくれたと思います。

ついこの前は「新しき鍵 私の幸福論」というご主人である光世さんのことを書いたエッセーを聞きました。お二人が支えあい高めあいたわり助けあって生活していったことを書いた作品でした。私は一生独身で過ごしましたが、一人の女性として憧れます。毎日の生活の中へ信仰や人生の先輩であるこの方の体験に基づいた言葉や姿勢を少しでも身につけていけたらと思います。（ご利用者Fさん）

『受けるよりは与える方が幸いである』

(使徒20:35)

— 難病にもめげず主と共に歩んだ野村康雄さんを偲んで —



羽野先生と指点字で話す野村さん

世界でも珍しい難病、頭蓋骨幹端部骨異形成症。名古屋大学で精密検査をしても病名不明。首から上の骨が異常に増殖する。生まれつきそれほど丈夫ではなかったが小学校3年生ころまでは走り回って遊んでいた。数年後視力が0・3まで落ちた。頭蓋骨の増殖で視神経が圧迫される。よく転ぶようになった。それでもまだ耳は聞こえた。中学3年で高校受験を諦め、岡崎盲学校に進学した。このころから耳の聞こえも悪くなり始めた。病状はかなり悪化していたが、1972年鍼灸マッサージ師の国家試験に合格した。盲学校を卒業し、成績優秀な野村さんは鍼の勉強を続けるため、東京の平方鍼(はり)科学研究所に進んだ。しかし翌年かすかに聞こえていた聴力も失われた。名大で手術をしようとしたが複雑な脳神経が危険だとのことで諦めざるを得なかった。耳だけはという僅かな望みも失われた。

平方鍼(はり)研究所はキリスト教系の研究所だった。付属する信愛ホームの交わりの中で聖書に出会った。ヨハネ福音書9章3節、「目が見えないのは誰が罪を犯したのでもない、神のみ業が現れるため」というイエスのみ言葉が野村さんの心を打った。

6年間の鍼の学びを終え、富士市の自宅に帰り、鍼治療院を開業した。盲聾の野村さんの仕事を支え、患者さんとの言葉を通訳してくれたのはお母さんだった。厚生大臣指定講習会にも通った。お父さんが付き添って通訳してくれた。

野村さんには、もう一人、素晴らしい援助者が与えられた。キリスト者の医師である住吉勝也氏(日本キリスト者医科連盟会員)で泊りがけで細やかに指導をされ、同じ医科連盟の月岡米子姉妹を通して地元の教会に導いてくれた。野村さんは富士市の吉原富士見教会に通うようになった。教会では牧師の羽野浩雪先生

を初め会員の暖かい交わりに支えられた。野村さんは喋ることは普通にできたから、左の掌にひらがなと数字を書いて伝えると会話ができた。礼拝の説教も会員が当番で通訳してくれた。野村さんは間もなく洗礼を受けられ、それから40年間、羽野牧師の下で教会生活を守られた。

「受けるより与える方が幸いである」というイエスのみ言葉が野村さんのモットーだった。不自由な中、教会学校で子供たちにお話もした。賛美歌も大好きだった。会員が肩にトントンとリズムを刻むと、点字の歌詞を読んで楽しそうに歌った。

家では鍼の仕事に励んだ。拒食症の少女を癒したり、鍼の勉強会にも積極的に参加した。エスペラント語の勉強にも励んだ。盲人伝道センターの点訳や校正奉仕にも熱心に取り組まれた。

パソコンの普及で情報をいち早く入手できるようになると野村さんの生活は一変した。友達とメールでやりとりできるようになったし、ますます情報通になった。この頃の生活がいちばん充実して楽しそうだったそうだ。しかし、普通の人より3倍重たい頭を支えながらのパソコン作業は、野村さんの体には負担が大きかった。徐々に体調が悪くなり、背中が曲がった。曲がった背中最後まで頑張って完成させた点訳書は「口語訳聖書」全巻だった。最後のデータは亡くなられた後でセンターに届けられた。



教会学校での野村さん

\*野村康雄さんは2023年2月4日天に召されました(享年71歳)。機関紙の原稿を書いて下さるお約束だったのですが体調不良でかなわずこの原稿は妹さんの啓子さんと羽野牧師からお話を伺ってまとめたものです。(文責 島田充子)

# 声

## 貸し出しの窓から見てくるもの

静岡盲伝センタースタッフ 遠山百合子

1冊の図書は、選書と音訳・点訳奉仕者の選定から始まります。お見合いでもそうですが、本と奉仕者のマッチングが簡単そうで実はなかなか難しいです。音訳・点訳されたデータを一言一句間違いのないものに仕上げるための校正・編集作業を行い、完成後はセンター通信やサピエ図書館で皆様にお知らせし、発送します。奉仕者皆様のお力で完成したCDや点字を通して、センターと利用者を繋ぐ橋渡しの役目が、貸し出し担当の私の仕事です。この橋渡し現場から体験したことなどをお話いたします。

- ① 40年以上前にTVでも放映された、ローラ・インガルスに関する「大草原の小さな家で」という本が、去年は数か月にわたって貸し出し大ブレイクがありました。10年以上貸し出し担当をしていますが、こんなに沢山の図書館や利用者から集中して貸し出しのあったCDは未だかつて一枚もありませんでした！
- ② 朝日新聞懸賞小説に「氷点」でみごと入選なさった三浦綾子氏の図書は当センターにも100タイトル以上の図書がありますが、今でも安定した人気がありますね。さすがクリスチャン作家の金字塔です。
- ③ 日本語が簡素化しつつある現代でも、文語訳聖書は必ず貸し出し希望があります。
- ④ リクエストは今の社会を映し鏡のように反映しています。例えば、去年の事件を受けて統一教会関連

やカルト問題などの本、また、今年6月に法制化されたLGBT法に関連した「LGBTQとキリスト教」という図書も貸し出しがあります。

- ⑤ 毎回返却時に多岐の分野にわたってリクエストされる方には、何歳になっても好奇心旺盛で勉強熱心な方などと敬服いたしております。

他館ではカセットテープの貸し出しを終了しているところもありますが、当センターはカセットテープ、CD、USB、SD、データのネット送信、点字等、現在でも必要な媒体で貸し出しをしています。今後も可能な限りサービスを継続していきたいと願っています。そのために、皆様のお祈りと貴い捧げものをもって、これからもセンターを支えてくださいますようお願いいたします。



### 編集後記

今号は、60号特集号です。盲牧師 故青山輝徳先生のご意志が、50年余、皆さまのご厚意に支えられてきたことに神様のみ業を思い感謝でいっぱいです。神さまはどんな試練にあっても先生に多くの援助者を与え支えて下さいました。朝早くから汗だくになって働いておられた先生ご自身の努力も涙なくしては語れないほどでした。今は亡き青山先生ですが、懐かしく説教なさる姿が思い出されます。盲目の先生には講壇正面の時計が見えないので、時として礼拝説教が昼の12時を回ってしまったりしました。語りた、伝えたい、その思いは本当に強いものでした。そしてその情熱が今も盲伝センターを支えているのだと思います。どうぞ、これからも神さまの祝福のうちに盲伝センターから日本中の視力の不自由な方々に福音が届けられますよう皆さまのご支援を心からお願いいたします。(S)